



中村 哲・尚子

ロンドン

Abbey Missionary School
で研修中

パキスタン・ベジャワール

ミッション・ホスピタル派遣予定

お元気ですか。ロンドンのThe Abbey Missionary Schoolでの研修についてレポートします。

10月5日より12月14日まで10週間、家内と2人で英語の研修をいたしました。家内は初級、小生は上級でしたが、上級のクラスは検定試験向のもので、読み書き、文法のレッスンが多かったので、途中で会話や討論が中心の中級クラスに入れてもらいました。このクラスは看護婦が多く、中にはパキスタンに時を同じくして北西辺境州に赴任予定の者もあり、いろんな意味でためになりました。

研修内容は、一応「英語」となっていますが、「ミッションナリー・スクール」と名のついている通り、90%以上はキリスト教関係者で、その半分以上は、将来、ミッションナリー又は、クリスチャン・メディカル・ワーカーを志す人たちでした。国別にみると北欧諸国とスイスの学生が約3分の2を占め、その他日本10名など合計約90名で、能力別に7クラスに編成されていました。年令は殆んどが20才代で、小生なぞは学生というよりはオジさま扱いで、事あるごとにクラス代表で話をさせられたりしました。

授業は単に英語の教科書を教えるのみでなく、毎朝30分のチャペルと昼間1時間のバイブルクラスがあり、授業中でも讃美歌のけいこをしたり、楽しいものでした。

しかし、語学そのものよりも、各国から集まってくるクリスチャン・ワーカーとの交わりや、外国生活に慣れる一段階であることを思えば、ずっと実りのある研修だったと思います。とくに外国でのメディカル・ワーカーを目指して努力している人たちとの交わりは、大いに刺激になりました。JOCSのような組織は、ヨーロッパでは珍しいものではなく、遠くパキスタンで働くといっても、だれもそれを斜めからみて意地悪い批判をする者は居ません。無条件に励ましてくれます。研修ひとつとっても、地元の方々（とくに救世軍）が様々な形でよこんで協力してくれます。私たちの働きが、決してひとりの力、ひとつの組織の力でできるのではなく、多くの人々の支えと協力があってできるのだということを改めて実感できたのも大きな成果だったと思います。

家内の方は、英語はゼロからの出発に近かったので、大きな進歩があったとはいえ、まだまだです。しかし国外生活の不便さに耐えられる自信がついたのが、なよりの成果です。子どもたちも心身共に、思ったより問題は今のところありませんでした。今の生活はベジャワールに比べると遙かに不安定ですので、おそらく赴任の際は、ずっとおちついた気持で行けることでしょう。

以上の通り、全体的にみて、満足できる研修だったと、私たちは思っています。今後もみなさんの祈りに支えられて研修が続けられますように。